大阪日本民芸館　2021年秋季特別展

型絵染　三代澤本寿（みよさわもとじゅ）

大阪日本民芸館について

大阪日本民芸館は、千里万博公園の文化ゾーンの中に位置しており、日本庭園、国立民族学博物館に隣接しています。1970年3月から9月にかけて開催された日本万国博覧会において、関西財界企業有志と東京・駒場の「日本民藝館」が出展したパビリオンが元になっています。パビリオン「日本民藝館」では、「暮らしの美」をテーマに、江戸期の古民藝、当時の産地の手仕事、個人作家の新作品が展示されました。

万博終了後、財団法人大阪日本民芸館（2012年4月より公益財団法人へ移行）が設立され、柳宗悦（やなぎむねよし）（1889-1961）が提唱した民藝運動の西の拠点、大阪日本民芸館として1972年に開館しました。陶磁器・染織品・木漆工品・編組品など、国内外から作品を収集し、展示公開を行ってきました。現在は、年2回（春季・秋季）の特別展を開催しています。

民藝とはなにか

民藝とは、民衆的工芸の略で柳らが作った造語です。彼らは、無名の職人によってつくられた日用雑器に驚くべき美を発見しました。

柳の新しい美の発見はまず朝鮮から始まり、日本の各地方にまで広がりました。当時、柳が発見した品々は、美的価値を認められておらず、「下手物」や「雑器」と呼ばれていました。そこで柳は、これに変わる新しい呼び名として「民衆的工藝」、略して「民藝」という呼び名を創造します。

民藝という新しい美を世の中に紹介した柳の活動には、陶芸家の濱田庄司（はまだしょうじ）(1894-1978)、河井寛次郎（かわいかんじろう）(1890-1966)、バーナード・リーチ（1887-1979)、芹沢銈介（1895-1984)、棟方志功（1903-75）といった優れた個人作家達も加わっており、民藝を糧としてそれぞれに優れた作品を生み出しました。

民藝の特性について、柳は著書『工藝の道』の中で、「実用性」、「無銘性」、「多量性と廉価性」、「地方性」、「協業性」を挙げています。つまり、特定の個人が作ったものではなく、それぞれの地方の暮らしぶりに応じた実用性を、何世代にもわたる職人と使い手が追求してきた結果、自然と生み出された造形を指すものとしています。

さらに、柳は仏教思想の研究にも力を入れ、民藝との関連にも言及しています。沖縄や北海道をはじめとした地方の手仕事にも目を向け、様々な生活文化の中に美を発見し紹介しました。

型絵染　三代澤本寿〈第一展示室～第四展示室・特別展〉

長野県松本に生まれた三代澤本寿（1909-2002）は、染色家として数々の優れた作品を生みだすと共に、日本民藝協会長野県支部の発足に携わり信州における民藝運動の礎を築いた人物です。民藝運動の中心部では、創始者である柳宗悦の代表的な著作や機関誌である『工藝』の装幀を手掛けるなど若手の作家としても期待が寄せられていました。

三代澤が民藝運動と出会ったのは、親戚の家業を手伝うために静岡に引っ越した1935年のことでした。近所に住んでいた版画家の小川龍彦から、民藝のことやその同人達の話を聞き、自らも柳の著作を読んで関心を深めていきます。同年の秋には、静岡の県展に出品されていた芹沢銈介の作品を目にして、その場から立ち去りがたい程の強い感激を覚えたと言います。これをきっかけに染色を知った三代澤は、芹沢に師事して型絵染作家を目指して歩みだします。

型絵染とは、型を用いて布や紙に模様を染める技法です。この技法は防染糊を水で洗い流す工程があるために、和紙に対して行うことは難易度が高いと考えられていましたが、三代澤は和紙をこんにゃく糊で揉んで強度を高めた強製紙を主な材料に用いて、型絵染の持ち味と和紙の風合いを生かした数多くの作品を手掛けました。

民藝運動の創始者である柳宗悦も、三代澤にとっては生涯の師でした。1939年に日本民藝館で柳と初めて対面した三代澤は、これ以降本格的に民藝運動に参加していきます。柳もまた三代澤に大きな期待と信頼を寄せ、『諸国の土瓶』、『日田の皿山』といった柳の代表的な著作や、運動の機関誌である『工藝』の装幀を任せました。民藝運動のもう一つの機関誌である『民藝』には、柳と出会って間もなくから故郷の手工芸に関する文章を寄せています。さらに、1945年に戦局の悪化に伴い帰郷してからは、松本の民藝を牽引していきます。戦後間もなく旧友の丸山太郎（後の松本民芸館初代館長）らと日本民藝協会長野県支部を発足し、これ以降は染色家としての創作活動に加えて、故郷の手仕事を支援しその発展のために力を注ぎました。

1960年代以降、柳亡き後の三代澤は徐々に運動の中心を離れ、一人の作家として新しい世界へ踏み出していきます。山々に登り、クラシック音楽を楽しみ、取材旅行として積極的に海外にも出かけました。こうした経験は創作の源流となり、多くの優れた作品として結実しました。晩年には海外でも評価を受け、フィンランド・エスポー市美術館で「三代澤本寿型絵の世界展」が開催されました。

三代澤の後半生は旅と創作に情熱を注ぎ、独自の作品世界を築き上げましたが、「民藝」自体から距離を置いたわけではありませんでした。柳から贈られた富岡鉄斎の言葉「万巻の書を読み、万里の旅をせよ」は生涯座右の銘に在り続け、自らの暮らしの中には美しい手仕事の道具が息づいていました。1960年代後半からの三代澤の作品には、人々の暮らしの風景や道具、雄大な自然、あるいは信仰や祈りにまつわる造形など、民藝の精神と通じる数々のモチーフが登場しています。こうした創作の姿勢や生き方そのものにも、三代澤の中に民藝の美意識が受け継がれていることが窺えるでしょう。

「型絵染 三代澤本寿」出品リスト

作品番号	作者	作品名	年代	所蔵
1	バーナード・リーチ	三代澤本寿肖像画	1953年	個人蔵
2	装幀:三代澤本寿	柳宗悦著『諸国の土瓶』	1943年	個人蔵
3	装幀:三代澤本寿	柳宗悦著『日田の皿山』	1943年	個人蔵
4	装幀:三代澤本寿	村岡景夫著『津軽のこぎん』	1943年	個人蔵
5	装幀:三代澤本寿	『工藝』110号	1942年	大阪日本民芸館
6	装幀:三代澤本寿	『工藝』112号	1942年	大阪日本民芸館
7	装幀:三代澤本寿	『工藝』113号	1943年	大阪日本民芸館
8	装幀:三代澤本寿	『工藝』114号	1943年	大阪日本民芸館
9	装幀:三代澤本寿	『工藝』115号	1946年	大阪日本民芸館
10	装幀:三代澤本寿	『工藝』119号	1948年	大阪日本民芸館
11	三代澤本寿	松本城	制作年不詳	個人蔵
12	三代澤本寿	信濃路	制作年不詳	個人蔵
13	三代澤本寿	山と本棟造	制作年不詳	個人蔵
14	三代澤本寿	アトリエ画材		個人蔵
15	三代澤本寿	てまり	1985年頃	個人蔵
16	三代澤本寿	『河童の妙薬』	1948年	個人蔵
17	三代澤本寿	松本市『市勢要覧』表紙	1950年	個人蔵
18	三代澤本寿	「地方文化と工藝」「濱田庄司氏作陶展」ポスター	1946年	個人蔵
19	三代澤本寿	瀬戸本業窯包装紙デザイン	1980年代	個人蔵
20	三代澤本寿	新源氏香	1991年	個人蔵
21	三代澤本寿	サクサイワマン、クスコ	1985年	個人蔵
22	三代澤本寿	南北東西	1982年	個人蔵
23	三代澤本寿	ラヴェル讃歌	1990年	個人蔵
24	三代澤本寿	ロマネスク願文 (スペイン・サントドミンゴデシロスにて)	制作年不詳	個人蔵
25	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
26	三代澤本寿	シロスの願文	制作年不詳	個人蔵
27	三代澤本寿	ペルシャの皿絵	制作年不詳	個人蔵
28	三代澤本寿	潮	1970年	松本市美術館
29	三代澤本寿	グラゴルミサ・幻想	1985年	個人蔵
30	三代澤本寿	朝のティカル	1985年	個人蔵
31	三代澤本寿	ティカル	制作年不詳	個人蔵

32	三代澤本寿	ランチョA	制作年不詳	個人蔵
33	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
34	三代澤本寿	セレベスにて(スラウェシ)	1984年	個人蔵
35	三代澤本寿	ナスカの印象	1980年	個人蔵
36	三代澤本寿	パラ—ドA	1989年	個人蔵
37	三代澤本寿	フォーレ	1985年	個人蔵
38	三代澤本寿	ボレロ	1985年	個人蔵
39	三代澤本寿	オラトリオ	1985年	個人蔵
40	三代澤本寿	ハーフェズの詩	1976年	個人蔵
41	三代澤本寿	カンタータ	1985年	個人蔵
42	三代澤本寿	G線上のアリア	1985年	個人蔵
43	三代澤本寿	タンホイザー(ワーグナー)	1985年	個人蔵
44	三代澤本寿	フラメンコ	制作年不詳	個人蔵
45	三代澤本寿	ネックレス数々	制作年不詳	個人蔵
46	三代澤本寿	洗濯女の歌	制作年不詳	個人蔵
47	三代澤本寿	ラ・カンパネッラ	制作年不詳	個人蔵
48	三代澤本寿	径(みち)	1988年	個人蔵
49	三代澤本寿	赤黒モサラベ	1988年頃	個人蔵
50	三代澤本寿	モサラベ	1983年	個人蔵
51	三代澤本寿	モサラベ多色	制作年不詳	個人蔵
52	三代澤本寿	モサラベ	制作年不詳	個人蔵
53	三代澤本寿	台湾の納屋	制作年不詳	個人蔵
54	三代澤本寿	シラカバ	1969年	個人蔵
55	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
56	三代澤本寿	ハンガリーの農家	1985年	個人蔵
57	三代澤本寿	ランチョF	制作年不詳	個人蔵
58	三代澤本寿	ポルトガルの風車	制作年不詳	個人蔵
59	三代澤本寿	にわとり	制作年不詳	個人蔵
60	三代澤本寿	タイ奥地の家(カレン族の家)	制作年不詳	個人蔵
61	三代澤本寿	型絵染パネル	1960年	個人蔵
62	三代澤本寿	型絵染パネル	1960年	個人蔵
63	三代澤本寿	南の国のスラウェシ	1960年	個人蔵
64	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵

65	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
66	三代澤本寿	ランチョD	制作年不詳	個人蔵
67	三代澤本寿	作品BA	制作年不詳	個人蔵
68	三代澤本寿	東トルコ(カルスにて)	制作年不詳	個人蔵
69	三代澤本寿	東欧の民具	制作年不詳	個人蔵
70	三代澤本寿	DISTAFF(紡具)	制作年不詳	個人蔵
71	三代澤本寿	ディスタッフ(紡具)	制作年不詳	個人蔵
72	三代澤本寿	カスパにて	1985年	個人蔵
73	三代澤本寿	バビロンにて	制作年不詳	個人蔵
74	三代澤本寿	アヒル	1971年	個人蔵
75	三代澤本寿	花A	1971年	個人蔵
76	三代澤本寿	ニワトリ	1971年	個人蔵
77	三代澤本寿	花B	1971年	個人蔵
78	三代澤本寿	タンポポ	1971年	個人蔵
79	三代澤本寿	貝	1971年	個人蔵
80	三代澤本寿	ヒマワリ	1971年	個人蔵
81	三代澤本寿	ツバキ	1971年	個人蔵
82	三代澤本寿	ポルトガルの風見鶏	制作年不詳	個人蔵
83	三代澤本寿	シカ	制作年不詳	個人蔵
84	三代澤本寿	ツグミ	制作年不詳	個人蔵
85	三代澤本寿	どんぐり	制作年不詳	個人蔵
86	三代澤本寿	どんぐり	制作年不詳	個人蔵
87	三代澤本寿	聖女	制作年不詳	個人蔵
88	三代澤本寿	フクロウ	制作年不詳	個人蔵
89	三代澤本寿	シカ	制作年不詳	個人蔵
90	三代澤本寿	クワガタムシ	制作年不詳	個人蔵
91	三代澤本寿	カブトムシ	制作年不詳	個人蔵
92	三代澤本寿	型絵染飾布(二種)	制作年不詳	個人蔵
93	三代澤本寿	型絵染飾布	制作年不詳	個人蔵
94	三代澤本寿	紬地飾布	制作年不詳	個人蔵
95	三代澤本寿	型絵染飾布	制作年不詳	個人蔵
96	三代澤本寿	小鳥	1981年	個人蔵
97	三代澤本寿	収穫	1982年	個人蔵

98	三代澤本寿	カタツムリ	1966年頃	個人蔵
99	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
100	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
101	三代澤本寿	ローエングリン	制作年不詳	個人蔵
102	三代澤本寿	型絵染紙	制作年不詳	個人蔵
103	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
104	三代澤本寿	Katachi白	制作年不詳	個人蔵
105	三代澤本寿	型絵染パネル	制作年不詳	個人蔵
106	三代澤本寿	型絵染紙	制作年不詳	個人蔵
108	三代澤本寿	のぞみ	1985年	個人蔵
109	三代澤本寿	抽象F	1975年	個人蔵
110	三代澤本寿	四季の繁み	1985年	個人蔵
111	三代澤本寿	海外の民具	制作年不詳	個人蔵
112	三代澤本寿	染絵	制作年不詳	個人蔵
113	三代澤本寿	ペルシャの皿絵	制作年不詳	個人蔵
114	三代澤本寿	野鳥	1985年	個人蔵
115	三代澤本寿	風車	制作年不詳	個人蔵
116	三代澤本寿	マリア	制作年不詳	個人蔵
117	三代澤本寿	踊り子	制作年不詳	個人蔵
118	三代澤本寿	チャドルの女	制作年不詳	個人蔵
119	三代澤本寿	染紙各種	制作年不詳	個人蔵
120	三代澤本寿	山と古城（アフガニスタン）	1974年	個人蔵
121	三代澤本寿	アンデスの遺跡	制作年不詳	個人蔵
122	三代澤本寿	聖なる建物（外国の風景）	1974年	個人蔵
123	三代澤本寿	カサ・バトリョ	1972年	個人蔵
124	三代澤本寿	染紙各種	制作年不詳	個人蔵
125	三代澤本寿	雲母引染紙	制作年不詳	個人蔵
126	三代澤本寿	染紙各種	制作年不詳	個人蔵
127	三代澤本寿	マチュピチュ	制作年不詳	個人蔵
128	三代澤本寿	モスク	制作年不詳	個人蔵
129	三代澤本寿	染絵	制作年不詳	個人蔵
130	三代澤本寿	ティカルの神殿	制作年不詳	個人蔵
131	三代澤本寿	トラジャ族の家（トンコナン）	制作年不詳	個人蔵

132	三代澤本寿	家	制作年不詳	個人蔵
133	三代澤本寿	スペインの煙出し	1972年	個人蔵
134	三代澤本寿	ブダの古城館	制作年不詳	個人蔵
135	三代澤本寿	農家(二階家)	1974年	個人蔵
136	三代澤本寿	フクロウ	制作年不詳	個人蔵
137	三代澤本寿	ニワトリ	制作年不詳	個人蔵
138	三代澤本寿	ニワトリ	制作年不詳	個人蔵
140	三代澤本寿	建物	制作年不詳	個人蔵
141	三代澤本寿	カルトン	制作年不詳	個人蔵
142	三代澤本寿	カルトン	制作年不詳	個人蔵
143	三代澤本寿	カルトン	制作年不詳	個人蔵
144	三代澤本寿	高山植物	制作年不詳	個人蔵
145	三代澤本寿	海外の建物	制作年不詳	個人蔵
146	三代澤本寿	高山植物	制作年不詳	個人蔵
147	三代澤本寿	アザミ	制作年不詳	個人蔵
148	三代澤本寿	家	制作年不詳	個人蔵
149	三代澤本寿	着物	1950年代	個人蔵
150	三代澤本寿	羽織	1950年代	個人蔵
151	三代澤本寿	着物	1940年代	個人蔵
152	三代澤本寿	ホオズキ	制作年不詳	個人蔵
153	三代澤本寿	アジサイ	制作年不詳	個人蔵
154	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
155	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
156	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
157	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
158	三代澤本寿	卓布	1983年	個人蔵
159	三代澤本寿	卓布	1983年	個人蔵
160	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
161	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
162	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
163	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
164	三代澤本寿	花	制作年不詳	個人蔵
165	三代澤本寿	植物	制作年不詳	個人蔵

166	三代澤本寿	植物	制作年不詳	個人蔵
167	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
168	三代澤本寿	型絵染帯	制作年不詳	個人蔵
169	三代澤本寿	染絵	制作年不詳	個人蔵
170-1	三代澤本寿	信濃路	確認	個人蔵
170-2	三代澤本寿	信濃路	確認	個人蔵
171	三代澤本寿	型絵染飾布	1970年代	個人蔵
172	三代澤本寿	モサラベ	1979年	個人蔵
173	三代澤本寿	型絵染飾布	1983年	個人蔵
174	三代澤本寿	型絵染飾布	制作年不詳	個人蔵
175	三代澤本寿	型絵染飾布	制作年不詳	個人蔵
176	三代澤本寿	四季つれづれ屏風	1997年	個人蔵
177	三代澤本寿	いろは	制作年不詳	個人蔵
178	三代澤本寿	正法眼蔵	1997年	個人蔵
179	三代澤本寿	型絵染板パネル	制作年不詳	個人蔵
182	三代澤本寿	エーデルワイス	制作年不詳	個人蔵
183	三代澤本寿	のれん	制作年不詳	個人蔵
184	三代澤本寿	切りかぶ	制作年不詳	個人蔵
185	三代澤本寿	のれん	制作年不詳	個人蔵
186	三代澤本寿	樹	制作年不詳	個人蔵
187	三代澤本寿	花	制作年不詳	個人蔵
188	三代澤本寿	白山とエーデルワイス	1971年	個人蔵
189	三代澤本寿	アカゲラ	制作年不詳	個人蔵
190	三代澤本寿	のれん	制作年不詳	個人蔵
191	三代澤本寿	マリア	制作年不詳	個人蔵
192	三代澤本寿	型紙	制作年不詳	個人蔵
193	三代澤本寿	型紙	制作年不詳	個人蔵
194	瀬戸本業窯	瀬戸本業窯包装紙	制作年不詳	個人蔵
195	三代澤本寿	のれん	制作年不詳	個人蔵

三代澤本寿略年譜

1909年（明治42）　4月15日、松本市埋橋に父寿一、母はるの長男として生まれる。

1916年（大正 5）　松本尋常高等小学校開智部に入学、のちに源池部へ移る。同級生に丸山太郎、池田三四郎らがいた。

1935年（昭和10）　秋、染料店を営む静岡の姉夫婦のもとに滞在、染物教室を手伝う。家の裏手に住む版画家の小川龍彦を通じ、民藝運動のことや民藝同人との知己を得る。静岡の県展に出品されていた芹沢銈介の染色作品に出会い、染色の道を志す。

1938年（昭和13）　安倍川紙子をヒントに染紙をはじめる。

1939年（昭和14）　日本民藝館を見学、柳宗悦と出会う。

1941年（昭和16）　静岡在住の染織家・外村吉之介を知る。芹沢の指導により『工藝』の表紙づくりに携わる。

1942年（昭和17）　芹沢銈介からの推薦を受け、雑誌『工藝』第110号の表紙を手がける。

1943年（昭和18）　静岡大谷に滞在中の柳宗悦と行き来し、一緒に古道具屋めぐりをする。日本民藝協会静岡支部が発会、役員に就任する。『民藝』2月号に「和紙の有難さ」を執筆する。御殿場にある秩父宮別邸の枕屏風制作依頼が来る。柳に依頼されて、工藝選書などの表紙となる各種型絵染の染紙を制作する。銀座・たくみで初の個展が開催される。日本民藝館でも芹沢銈介、岡村吉右衛門と共に合同展を開催。これ以降、展覧会という形で作品の発表が始まる。

1945年（昭和20）　2月、母の病気と戦局の悪化により、松本へ帰郷する。4月、旧友の丸山太郎（後の松本民藝館初代館長）らと、日本民藝協会長野県支部結成について話し合う。

1946年（昭和21）　5月、日本民藝協会長野県支部を発足。以降は信州の手工芸の調査を行い、その支援に取り組んでいく。12月、三代澤の特集号とも言うべき『工藝』第115号が発行。「染紙のこと」を三代澤が、「三代澤君のこと」を柳がそれぞれ執筆する。三代澤は表紙の他、小間絵、実物挿図を製作した。

1947年（昭和22）　第21回国展に出品、初入選し会友に推挙される。これ以降、主に大型の屏風を毎年国画会に出品する。

1949年（昭和24）　国画会工芸部会員に推挙される。《染紙六曲屏風》が日本民藝館に収蔵される。

1953年（昭和28）　このころ、柳宗悦とともに開田村の麻布の指導を始める。7月、柳から染紙の参考資料として「タパ」の本を贈られる。8月、三代澤の世話で柳とバーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司が『焼物の本』執筆のため松本の霞山荘に長期滞在、彼らを囲み座談会を開催する。

1954年（昭和29）　新アトリエが完成する。8月～9月、『焼物の本』執筆のため三代澤の世話で、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、バーナード・リーチが約一ヶ月間、松本の霞山荘に滞在する。9月、柳、東筑摩郡下の石仏調査を実施、協力する。9月9日、丸山太郎、池田三四郎と共にNHK放送局の「民芸雑話」に出演する。豊田市の本多静雄の田舎家に唐紙用染紙を制作する。

1961年（昭和36）　4月、第35回国展に柳宗悦の見立てにより表具した屏風《型染六曲屏風》を出品する。4月、柳を訪ねて日本民藝館へ行き、昼食中、柳が倒れる。5月、柳没。『民藝』6月号に柳の追悼として「亡くなられる前後」を執筆する。

1967年（昭和42）　春、台湾を旅行する。この頃から世界中の様々な場所へ取材旅行として出かけていく。

1971年（昭和46）　第45回国展に《型絵染四曲屏風》を出品する。ソ連（現ウズベキスタン）のシルクロードの都市を取材旅行する。10月16日～11月13日、モロッコ、ポルトガル、スペイン、フランスを旅行する。

1972年（昭和47）　1月、マレーシア領北ボルネオへ招かれ、その後シンガポール、タイへ旅行する。

1973年（昭和48）　2月、ポルトガル・モロッコを旅行する。10月、アフガニスタンを旅行する。

1974年（昭和49）　4月～5月、トルコ、ギリシャ、ユーゴスラビア、ハンガリー、ソ連を旅行する。

1975年（昭和50）　4月末～5月、パリ、アムステルダムを旅行する。

1976年（昭和51）　3月、イラク、トルコ、イラン、ギリシャ、エジプト等を旅行する。

1977年（昭和52）　6月24日～25日、倉敷市民会館で酒津堤窯作品展として武内晴二郎と二人展を開催する。長野県厚生連篠ノ井病院レストラン「ねむの木」ロゴマーク、パネル、照明デザインなどを手掛ける。

1978年（昭和53）　7月29日～8月12日、ペルー、メキシコなど中南米と北米を旅行する。

1979年（昭和54）　12月22日～翌年1月9日、インド・ネパール染織・服飾研究の旅に出る。

1980年（昭和55）　12月25日～翌年1月9日まで、シリア、ヨルダン、モスクワを旅する。

1981年（昭和56）　『柳宗悦全集』第11巻の月報12に「長野県の民藝運動と柳先生をめぐる思い出」と題して寄稿する。「第35回ウェストン祭記念手ぬぐい」をデザインする。

1982年（昭和57）　『民芸手帖』の5月号から8回にわたって「柳先生に導かれて」と題した連載を執筆する。6月26日～7月12日、チベット地方（ラダック、デリー、スリナガル、カルギル、レー）を旅行する。

1990年（平成2）　7月、銀座ミキモトホールで「三代澤本寿型絵の世界展」を開催、フィンランド大使館員が訪れ、同国での個展開催を依頼される。8月26日～9月4日まで、フィンランドに招かれる。

1992年（平成4）　3月、フィンランド・エスポー市立美術館にて「三代澤本寿型絵の世界展」を開催する。

1993年（平成5）　第67回国画会に《絹の道の枝垂れ桑》を出品。これが国画会への最後の出品となる。

2002年（平成14）　11月26日、93歳で死去。

略年譜は松本市美術館で行われた「民藝のこころ・新たなる創造へ　型絵染三代澤本寿　生誕101年展」図録掲載略年譜を参考に作成した。